

攻殻機動隊に見る、「生」への憧れと「死」

平口 幸代

(京都文教大学大学院臨床心理学研究科博士前期課程)

ロボットは古くから、小説、漫画、アニメなどの作品を通して親しまれてきた。こうしたSF作品の中で活躍するロボットにも色々なタイプのものがあるが、ここで取り上げるのは、人型でAIを持っているような、人間を模倣しようとしたものである。このようなロボットは、形状や動作の点で人間に似ているだけでなく、人間の持つ意思や感情に似たものを持っているようにも描かれている。この意思や感情は、あくまでも「似たもの」であり、人間が持っているものと完全に同じではない。そのため、作品中のロボットは、ある側面では非常に優秀であるのに対し、どこか人間の気持ちや言葉を理解しきれず人間に及ばないところがあり、そのギャップは人々を惹きつける。

人間は、ロボットが人間を模倣したものであることを期待して開発しているせいか、「ロボットは、より高次の存在である人間に憧れ、人間のようになろうとするが、惜しいところまで行っても人間にはなれない」というイメージがあるようである。機械なのに頑張って人間のようになろうとしているとか、自分の存在や人間との違いに疑問を持ち一生懸命もがいているという描かれ方は、ロボットへ愛しさや可愛らしさを感じさせる一方、人間とロボットの間の越えられない壁の存在を示唆しているとも言える。ロボットはどれだけ高度に人間に似せられていても、あくまでも人間の役に立つように作られるため、意思決定の根本的な部分は人間の管理下にある。ロボットの持つ可愛らしさのような側面は、人間になりえない、人間を超えないという、人間より下の存在であるということを表したもののなのかもしれない。『攻殻機動隊』に登場するタチコマも、人型ではないものの、これに似た可愛らしさを持ったロボットである。

人間らしさのようなものを兼ね備え、しかしそれが未熟であるため幼さが目立つ。

昨今の目覚ましいロボット研究の発展によって、ロボットは形状や動作など、次々と人間の模倣に成功してきている。将来的には外見の上での人間とロボットの区別はますます難しくなると考えられる。そこで人間は「ロボットには心・感情がない」などといった内面的な違いを掲げた。しかし、人間の心や感情の仕組みを解明し、ロボットに感情のようなものをプログラムし、そのロボットが感情を持っているように見せるということはできる。それは感情のようなものであっても感情とは違ったものだとも言えそうであるが、どのような外部刺激に対してどのような反応を表出するかをプログラムされたものだという点ではそれほど差は見られず、違いを強く主張できなくなる。

これまでも人間とロボットの違いは技術によって埋められてきた。今後も、人間にあって（できて）ロボットにない（できない）ものは、いくら提示してもいつかは技術の進歩や考え方など何らかの形で解消されてしまうだろう。それについて人間の技術の進歩は素晴らしいと感じる反面、今度は人間とロボットを分ける壁がなくなり、ロボットが人間側に侵入してくることを想像し、不安も湧いてくる。人間もロボットも変わらないのであれば、人間が人間であることの価値が何であるのかが、自然に問われてしまうからだろう。人間とロボットを話題に、生命観、死生観などの観点から様々な議論がなされる様子は、人間とロボットには何か越えられないところがあるのだ、と一生懸命主張しようとしているようにも見える。アニメなどの中で人間とロボットをテーマにしている様子もまた同様である。

人間とロボットがほとんど変わらなくなってゆく中で、最後まで越えられない壁があるとするならばそれは何か。ここからは、あえて人型のロボットにこだわらず、『攻殻機動隊（一期）』に登場するタチコマ（戦車）という存在を参照しながら考えてみたいと思う。

『攻殻機動隊』シリーズでは、ロボットが人間を模倣した造りをしていることのほかに、人間側も身体に機械を取り入れる義体化を行っている。また、電腦化といって脳内の活動も電気信号に置き換えることも可能である。そのため人間とロボットの境界について曖昧になっている世界観であり、その境界について考える機会が豊富な作品である。そこに登場する『タチコマ』はひょんなことがきっかけで、人間の精神活動に近い状態を見せたり、個性が生まれたり、徐々に変化していくことになる。その変化の過程で描かれるタチコマたちに言動には、ロボットから人間へと近づく様子や、彼らの葛藤を読み取ることができ、その内容こそが彼らの本質であるようにも感じる。アニメ中のロボットのうちでも人型から遠い存在である彼らから発せられるセリフは非常に興味深い。人間らしさは、外見的な形状のみに規定されるわけではないということを改めて確認できる。

このタチコマの変化の過程で興味深いのは、「死」という概念に触れることの多さである。関連箇所について少し整理してみると、次のようになる。

第1話では、タチコマ数機が出動し、命令の遂行中に一機が破損するシーンがある。その機体について、他のタチコマ達が「いいないいな、壊れたよー。行動解析されちゃうかも」と興奮したように話す様子が描かれている。

第12話では、脱走したタチコマが少女と出会い、その少女が『死』をテーマにした体験談を語ったことに対しタチコマは、自分はAIであるため、『死』の概念や『悲しい』という感情は理解できず、その理由はAIにゴーストがなく死ぬことができないからではないかというこ

とを、よく考えながら語る。

第15話では、タチコマ達が急速な成長をしたことで、自立した個が生まれ、生と死についての興味や、自分たちの存在への疑問を持ち始めているため、兵器としては致命的であるとして、タチコマの使用停止が検討される回である。自分たちのことについて何か処分があると勘づいたタチコマたちが、口々に話すシーンがある。

「廃棄処分って死ぬのと同じなの？」

「経験可能領域に『死』ってない項目だからそれはなんとも」

「ゴーストを持たない僕たち AI の限界ってやつだな。所詮半不死。生きてないから死にもしない。ゴーストがないのがいろいろ問題」

「廃棄が『死』じゃない。物理的身体にゴーストが過不足なく一致する時代はもう終わったんだし」

「体のないデータの集積がゴーストを宿す可能性だってなくはない。」

「生きるってどういうことだと思う？」

「生命って言葉の定義が流動的」

「ロボットに接することで人間にとっての生命のイメージが無意識のうちに変わってきてるんだよ。たぶんね。変化してるのはロボットではなくてむしろ人間の方でしょ。」

また、タチコマと行動を共にすることの多いバトーとの会話では、自分の存在や生死について興味を持っている様子が次のように語られている。

「前にはよくわからなかった『神』ってやつが存在も近頃はなんとなくわかるような気がしてきたんだ。もしかしたらだけども、数字のゼロに似た概念なんじゃないかなって。体系を体系たらしめるために要請される意味の不在を否定する記号なんだよ。そのアナログなのが神で、デジタルなのがゼロ。どうかな？僕たちってさ、基本的な構造がデジタルなわけじゃない？だから僕たちがいくら情報を集積していても今のところゴーストは宿らない。でも基本がアナログベースなバトーさんたちには電腦化したり義体化してデジタルな要素を増やしていてもゴー

ストが損なわれることはない。しかもゴーストがあるから死ぬこともできる。いいよねー。ねーねー、ゴーストがあるってどんな感じ？」

16話以降

タチコマ達は結局使用停止となり、その後それぞれ、ラボで解体されるもの、民間企業へ払い下げになり新たな仕事を持つものなどへと分かれてゆく。9課を去っても記憶は保持されており、9課のピンチ時には、解体されずに残った3機が駆けつける（第25話）。そこで再開したタチコマ達は、仲間の身の振りについて情報交換をし、解体されたものについて「みんなそれぞれ死を体験できたんだね」としみじみと話す。そして、タチコマは変化の過程で身につけた「自己犠牲」によってバトーの危機を救う。

このように「死」について話題にする様子がみられるが、言葉のニュアンスでは、単に「死」に興味があるだけではなく、自分も体験したいという憧れも持っているようである。しかしタチコマは、成長したことを肯定的に捉えており、人間性を手に入れたがっているようである。つまり「生」に憧れているはずなのに、「死」に興味向きやすいのは方向が違っているように感じる。しかし、この「死」こそが、人間とロボットの越えられない壁を考える重要な要素なのではないだろうか。

タチコマが「死」について憧れているのは、「死」は生命に許された権利であり、無生物である自分たちにはそれがないということを意味しているようにとれる。他のことは全部人間を模倣できても、「死」は模倣できない。第2話で仲間の損傷について「壊れる」と表現したような機能停止状態が、タチコマの死に相当するものであると考えられる。しかし、「壊れる」という言葉も「死ぬ」という言葉も両方使用していることはそこに違いを見出していると考えられる。

生物にとって「死」は重要な意味を持っている。生物学の方でアポトーシスという生命現象

がある。個体全体の正常な発生のために一部の特定の細胞が積極的に死んでいくというもので、オタマジャクシがカエルになる過程で尾を失ったり、人間の胎児の指の間の水かきの部分が消失して手の形になったりする状態などが例としてあげられる。アポトーシスについては全てが解明されているわけではないが、細胞にはあらかじめ寿命や死がプログラムされており、生命はもともと死すべきものとして生まれてきていると考えて良いようである。生命が「死」によって形成されるという、「死」に積極的な意味を見いだせる現象である。タチコマは「死」によって生を証明しようとしたのではないかと感じる。

また、人間にとっての「死」、特に日本人の場合などを考えてみると、生物にとっての死よりもさらに複雑な要素がある。死亡は「呼吸の不可逆的停止」「心臓の不可逆的停止」「瞳孔拡散（対光反射の消失）」の3つの徴候をもって認定される。しかしそれは「死」を現象と捉えるだけの単純な見方である。医師が死亡診断をして死を確認した時刻から個人の存在は社会的、法的には無になるが、それが遺された人々にとっての個人の存在の終わりを意味するわけではない。納棺、火葬、骨拾いなどの葬送儀礼を通して何度も「死」を確認していく。

また、葬儀が始まる前に仏教の場合戒名が与えられる。戒名には、死んでから本当の仏教者となるための修業が始まりその際の名前であるといった意味があるが、一般的には俗名の代わりの名前、死者の個人名ととらえられている。戒名には姓にあたる部分はなく、どこにも属さない個としての死者が新たに強調され始める。葬儀の重要性は死者としての新たな誕生の手続きが行われているところにある。

「死」にまつわるこのような一連の儀礼は、「死」によって個人としてのその人物に焦点が当てられ、生かされてくるという様子を表している。ロボットが壊れて機能停止になっている状態に対してこのようなことは行われない。それはあくまでも機能停止しているだけであり、必要な部分さえ無事であれば修理などで再生す

ることが可能だからである。生の証明には、一回性が重要であり、タチコマには「壊れる」ではなく「死」が必要だったのだろう。

ここまで、人間とロボットを分ける壁について考える上で、「死」を大きく取り上げてきた。そして人間とロボットの間の壁で最後まで越えられない部分は「死」の有無ではないかという考えに行き着いた。もちろん、たくさんの考え方や価値観の中でのひとつの提案としてである。タチコマが「生」を証明するために「死」を望んだのでは、という捉え方をしてみたが、人間が自己の存在を確認するために自傷行為をするのと通じるところもあり、ロボットだけでなく人間にもありうることである。見たところ全く変わらない、違いといえば生物か無生物か、という人間とロボットとを並べたとき、自分は人間として生き生きとできているか、生きるということに自信はあるか、などといった自分の存在についての再確認が自然に行われる。生きにくい世の中では、その確認に対し良い返事をできないことも多いと思われる。生きていることを実感したり証明したりすることは難しく、そんな中で、「死」があるならそこに「生」はあ

ったのだろう、という確認方法が出てしまうことはそれほど不自然ではないと考えられる。

「死」を作り出すことは生産的ではないため、ロボット開発において、「死」に関する技術の発展はあまりないと考えられる。しかし、もしロボットに「死」が作られたとしたらどうだろう。とたんに人間臭くなり、ロボットであることの魅力がなくなってしまうのではないだろうか。人間とロボットの間に、「死」の違いは是非残しておいて欲しい。

参考文献

- 多田富雄（1997）生命の意味論 新潮社
- 戸田正直（1987）心をもった機械—ソフトウェアとしての「感情」システム ダイアモンド社
- 波平恵美子（2001）生命科学と倫理—21世紀のいのちを考える 脳死臓器移植論議にみられる日本人の「個人」の始りと終りについての考え方 関西学院大学出版会
- マイケル・S・ガザニガ（2010）人間らしさとはなにか？ インターシフト
- 前野隆司（2004）脳はなぜ「心」を作ったのか—「私」の謎を解く受動意識仮説 筑摩書房
- 前野隆司（2007）生命と自己—生命の教養学Ⅱ ヒトとロボットの心—「私」は幻想か？ 慶應義塾大学出版会